Ensemble Dimanche

アンサンブル ディマンシュ
第92回演奏会

2023年2月12日（日）

府中の森芸術劇場　ウィーンホール

【プログラム】

～イギリスにまつわる音楽～

メンデルスゾーン	序曲「フィンガルの洞窟」 Op.26
ハイドン	交響曲第93番ニ長調
	♩休憩♩
メンデルスゾーン	交響曲第3番イ短調 Op.56 「スコットランド」

【曲目紹介】

本日のプログラムは、イギリス訪問経験のある二人の外国人作曲家、ハイドンとメンデルスゾーンのイギリスにまつわる作品集です。イギリス訪問と一口に言っても、現在のように大陸から飛行機や鉄道で行ける時代ではありません。港まで馬車で何日も揺られ、船に乗り換えて行く旅は大変だったに違いありません。それにも関わらず、ハイドンは生涯に2回、メンデルスゾーンに至っては10回イギリスを訪問したと言われています。

◆メンデルスゾーン：序曲「フィンガルの洞窟」op.26

1829年、20歳のメンデルスゾーンは初めてイギリスを訪問していますが、この時にスコットランドを旅行しています。この曲は、スコットランド西岸沖に浮かぶフェブリデーズ諸島のスタファ島を訪ねたメンデルスゾーンが、フィンガルの洞窟に感銘を受けて、その印象を描いた「演奏会用序曲」です。1830年に完成し、当初は「孤独な諸島」と題されていましたが、その後メンデルスゾーンは何度も改訂を重ねており、標題も変わっていきます。日本では「フィンガルの洞窟」が一般的ですが、海外では「フェブリデーズ諸島」と呼ばれることも多いようです。

本日演奏する序曲「フィンガルの洞窟」は、ブライトコフ社から2005年に出版され、最近改訂された新版（ライプツィヒ・メンデルスゾーン全集に基づく原典版／シュミット編）を使用します。この新版には、今まで聴き慣れたもの（以下「旧版」という。）とは大きく異なる部分があります。7～8小節目のヴィオラ、チェロ、ファゴットの寄せ返す大波を思わせる旋律が欠落し、スケッチに書かれたものにすり替わっているのです。聴き慣れた人が聴くと非常に違和感があります。この新版の基になったのは、1834年に同社から出版された初版本です。メンデルスゾーンは完成後に何度も改訂していることから、現存しているかどうかは別として、初稿を始め複数の改訂稿が存在します。同社の初版本は1833年11月の最終改訂稿を基にしていると言われています。この最終改訂稿は紛失しているので実際は分かりませんが、問題の部分は1830年の初稿から旧版のものになっており、明らかに旧版の方が優れているため、メンデルスゾーン自身が最終改訂稿でスケッチのものに戻した（後退させた）とは考え難いです。そもそも、同社は1874年に初版本のその部分を改めて旧版を出版しています。それに他社が追随したため旧版が普及していったのです。

◆ハイドン：交響曲第93番ニ長調

ハイドンは、ザロモンの招きによって1791～95年に2回イギリスを訪問しています。ザロモンは、ロンドンに移住したドイツ出身のヴァイオリニストで、興行師としても活躍していました。交響曲第93番～第104番はこの2回の訪問時にロンドンで初演されているため「ロンドン交響曲」又は「ザロモン交響曲」と呼ばれています。このうち、1791～92年の第1回の訪問時にロンドンで作曲・初演された第93番～第98番は「第1期ロンドン（ザロモン）交響曲」と呼ばれています。

第93番は、1791年に作曲され1792年の2月にロンドンで初演されています。交響曲の番号順では第1期ロンドン交響曲の最初の曲ですが、実は、作曲順（初演順）では第96番、第95番の方が早く、3番目の交響曲です。ハイドンの交響曲の番号は、オランダの音楽学者ホーボーケン(1887-1983)がハイドンの作品を整理して目録を作成した際に付けられたものですが、第1期ロンドン交響曲の番号は作曲・初演順とは一致していません。出版順とも異なっています。

ハイドンの交響曲には、「驚愕」や「時計」などの愛称が付けられたものがありますが、これもハイドン自身が付けたものではなく、後に付けられたものです。特徴があって、愛称が付けられている曲は人気があってよく演奏されますが、それ以外の曲はあまり演奏されないのが実情です。100曲以上もあるのですから致し方ないことですが。とはいえ、この第93番にもいくつかの特徴があるので、それらが浸透すれば意外と人気が出るかもしれません。次の第94番は、静かな第2楽章で眠っていた観客を起こすように突然一発の大音響が鳴り響くことから、「驚愕」と呼

ばれ親しまれています。実は、この第93番にもハイドン特有のユーモアのセンスが表れた部分があるのです。第2楽章の終わり近くで静かになると、突然2本のファゴットがほぼ最低音で「ブーイング」か「おなら」のような音を発するのです。これは「驚愕」の前哨戦と思われます。いっそのこと、この曲に「ブーイング」とか「おなら」などの愛称を付けたら、「驚愕」同様に人気が出るかもしれません。

第1楽章 Adagio -Allegro assai ニ長調 3/4拍子

アダージョの短い序奏が終わると3拍子の優雅な主部が始まります。モーツァルトの交響曲第39番を思わせます。

第2楽章 Largo cantabile ト長調 4/4拍子

ハイドン特有のちょっととぼけた緩徐楽章です。終わり近くで静かになると、突然2本のファゴットがほぼ最低音で「おなら」を発します。ここがこの曲の一番の聴きどころです。ファゴット奏者には下品な音が求められているのですが、なにぶん一発勝負なので．．．。

第3楽章 Menuetto, Allegretto ニ長調 3/4拍子

メヌエットとトリオです。「Allegro」と標示されている版もありますが、古いブライトコフ社版（1855）では「Allegretto」になっており、曲想からもAllegrettoが正しいと思われます。トリオはメンデルスゾーンの結婚行進曲を思わせる三連符のファンファーレから始まり、短調の旋律が続きます。

第4楽章 Finale, Presto ma non troppo ニ長調 2/4拍子

タ・タ・タンというリズムで始まる軽快な楽章です。この動機が全体を支配しています。

◆メンデルスゾーン：交響曲第3番イ短調op.56「スコットランド」

この曲は、「フィンガルの洞窟」同様、1829年のイギリス訪問時のスコットランド旅行の印象を描いた作品です。スコットランドの首都・エディンバラにあるホリールード宮殿に隣接した廃墟の寺院からインスピレーションを得たと言われています。帰国直後に着想されていますが、完成は12年も後の1842年です。この12年間に、交響曲では第5番「宗教改革」(1830)、第4番「イタリア」(1833)、第2番「讃歌」(1840)が先に完成し、「スコットランド」はメンデルスゾーンの最後の交響曲になってしまいました。この曲が第3番と呼ばれるのは、出版順で3番目だからです。

この曲は、全楽章が続けて演奏されるように指示されています。ベートーヴェンの「運命」や「田園」においても特定の楽章が続けて演奏されることはありましたが、全楽章が続けて演奏されるのは当時としては珍しいことです。ちなみに全楽章続けて演奏される交響曲としては1841年に作曲されたシューマンの交響曲第4番が有名ですが、これは1851年の改訂版でそのように変更されたものです。したがって、メンデルスゾーンの方が先駆者です。ただ、シューマンの場合は、ある楽章の動機が他の楽章でも出てきて（循環方式）楽章間の統一性を図っているのに対して、この曲の場合は、単純に楽章がつながっているだけです。

この曲の第1楽章には不思議なことがあります。主部に入って第1主題が提示された後、すぐに「Assai animato」の指示があり、テンポを一段階上げるのですが、このテンポを元に戻すところが指示されてないのです。そのため、テンポを戻す場所は指揮者によってまちまちです。ところが、自筆譜を見ると、「Assai animato」のある場所には何も書かれていないのです。つまり、メンデルスゾーンは、多少の増減は別として、主部全体を同じテンポで演奏するように書いているのです。では一体、誰が「Assai animato」を書き加えたのでしょうか。ミステリーです。

第1楽章 Sinfonia, Andante con moto -Allegro un poco agitato イ短調 3/4拍子 -6/8拍子

自筆譜には、速度記号の上に「Sinfonia（シンフォニア）」とイタリア語で書かれています。この楽章は、ゆったりとした序奏の後に速い主部が続き、最後に序奏が繰り返されるバロック時代のシンフォニア（イタリア風序曲）の様式で書かれています。廃墟と化した寺院の印象からこの古い様式を採用したのでしょうか。ヴィオラとオーボエによって始まる序奏の物悲しい旋律は、まさに「荒城の月」を連想させます。（最初の音の進行が一緒です。）

第2楽章 Vivace non troppo ヘ長調 2/4拍子

2拍子の速いスケルツォ風な楽章です。第2楽章にスケルツォを置き、第3楽章を緩徐楽章とするのは、「第九」の影響と思われます。

第3楽章 Adagio イ長調 2/4拍子

メンデルスゾーンにしか書けない美しさを持った「無言歌」です。ケルティック・ハープ（スコットランドなどケルト系の伝統楽器）を模したと思われる弦楽器のピチカートの伴奏によって歌われる第1主題はセレナーデのようです。第2主題は短調に変わり、葬送行進曲風な暗い曲が歌われます。

第4楽章 Allegro vivacissimo イ短調 2/2拍子

規則正しい四分音符の刻みの上に、符点のリズムを伴った速い舞曲風の主題が奏でられます。コーダはイ長調6/8拍子に変わり、ヴィオラ群（クラリネット、ファゴットとホルン）により荘厳な主題が歌われます。この旋律は、2ndヴァイオリン群（＋オーボエ）、1stヴァイオリン群（＋フルート）の順に引き継がれ、楽器が加わって盛り上がっていきます。「田園」の第5楽章を思わせます。

【指揮者プロフィール】

平川　範幸（ひらかわ のりゆき）

福岡県出身。
福岡教育大学卒業。上野学園大学研究生〈指揮専門〉にて下野竜也、大河内雅彦の各氏に師事。桐朋学園大学オープンカレッジにて、黒岩英臣、沼尻竜典の各氏に師事。東京音楽大学特別講座にて、パーヴォ・ヤルヴィの指揮公開マスタークラスを受講する。
これまでに、音楽理論を中原達彦氏に、ピアノを田中美江氏に師事。
新日鉄住金文化財団指揮研究員として、紀尾井シンフォニエッタ東京、東京フィルハーモニー交響楽団のもとで活動する。その後東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団指揮研究員として、宮本文昭、飯守泰次郎、矢崎彦太郎の各氏をはじめとする指揮者のもとで研鑽を積む。
これまでに、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、オーケストラ・アンサンブル金沢、大阪交響楽団、千葉交響楽団、浜松フィルハーモニー管弦楽団、東京混声合唱団、広島ウインドオーケストラなどを指揮する。
2016年より2021年まで、仙台ジュニアオーケストラ音楽監督を務める。

♪　第９２回メンバー　♪

第1ヴァイオリン	三瓶政一、☆時山響子、戸張純一、中村　要、西川富之、西村 実、本山まり子
第2ヴァイオリン	相羽あゆみ、石嶺寿子、緒方　彩、宮本 敦、　♪森 未知、森上由紀
ヴィオラ	柴野かおり、下山純也、鈴木　智、♪関口孝司郎、山口 彰、
チェロ	植田圭司、緒方 淳、永田隆司、藤村ゆ香、♪三次摂子、
コントラバス	江川博之、♪須賀敬亮
	☆コンサートマスター　♪弦楽トップ
フルート	谷口玲子、徳植俊之
オーボエ	五十嵐健、市川亜理
クラリネット	鈴木千暁、中嶋智子
ファゴット	越島康太郎、星野未央
ホルン	尾形武一、友田昭博、町田明子、由川　裕
トランペット	内田直大、佐藤　瞭
ティンパニ	星野武徳
トレーナー	戸澤哲夫（東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団コンサートマスター）
練習指揮	山上孝秋

♪　次回の演奏会ご案内　♪

日時：２０２３年９月１６日（土）
場所：府中の森芸術劇場　ウィーンホール
指揮：平川 範幸
曲目：未定

詳細はＨＰ　http://www.e-dimanche.jp/　をご覧ください。
※招待券をご希望の方は、アンケートにご記入ください。

本日のアンコールについて

本日のアンコールは、

メンデルスゾーン：
劇付随音楽「真夏の夜の夢」op.61～夜想曲(抜粋)

でした。

　この曲は、イギリスの作家・シェイクスピアの喜劇「真夏の夜の夢」の付随音楽としてメンデルスゾーンが 1843 年に作曲したものです。本日のテーマ「イギリスにまつわる音楽」の一環です。ただし、この曲は、メンデルスゾーンがプロイセン王の依頼で書いたもので、イギリス訪問とは直接関係はないようです。

★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★ ★

シェイクスピアの戯曲の原題は「A Midsommer Nights Dreame (A Midsummer Night's Dream)」ですが、この「Midsummer Night」は祭りが行われる夏至の前夜を意味するので「真夏の夜」と訳すのはおかしいと、日本では「真夏論争」が勃発しました。しかし、実際には、戯曲の作者が「盛夏」なのか「夏至」なのか、どちらの意味でこの言葉を使っているかは、分かっていません。最近は、折衷案で「**夏の夜の夢**」と言われることが多くなっていますが、変化を好まない古い人間には違和感があります。夏至も暦の上では「真夏」とも言えるし、夏至の祭りよりお盆の方が浸透している日本では、「真夏」と訳した方がピンとくるのではないでしょうか。ただし、メンデルスゾーンの劇音楽の原題は、ドイツ語の「Ein Sommernachtstraum（アイン・ゾンマー・ナハト・シュトゥラウム）」です。これだと「**夏の夜の夢**」と訳すべきかもしれませんね。ちなみに、ドイツ語で「真夏」は、「Hochsommer（ホッホ・ゾンマー）」と言うらしいです。